

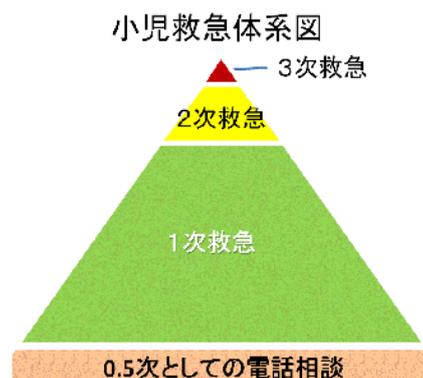
みんなで支える小児救急医療

医療は誰が守る

阪神北広域こども急病センター センター長
山崎 武美

<救急医療態勢>

地域の救急医療は都道府県が定めた医療圏ごとに重症度に応じて、一次救急医療(軽症)、二次救急医療(中等症)、三次救急医療(重症)に分けられています。救急医療の態勢は市町村並びに都道府県の指導のもとに整備されています。小児救急患者の95~98%は一次救急の患者となっているのが実情です。



<阪神北圏域の小児救急医療>

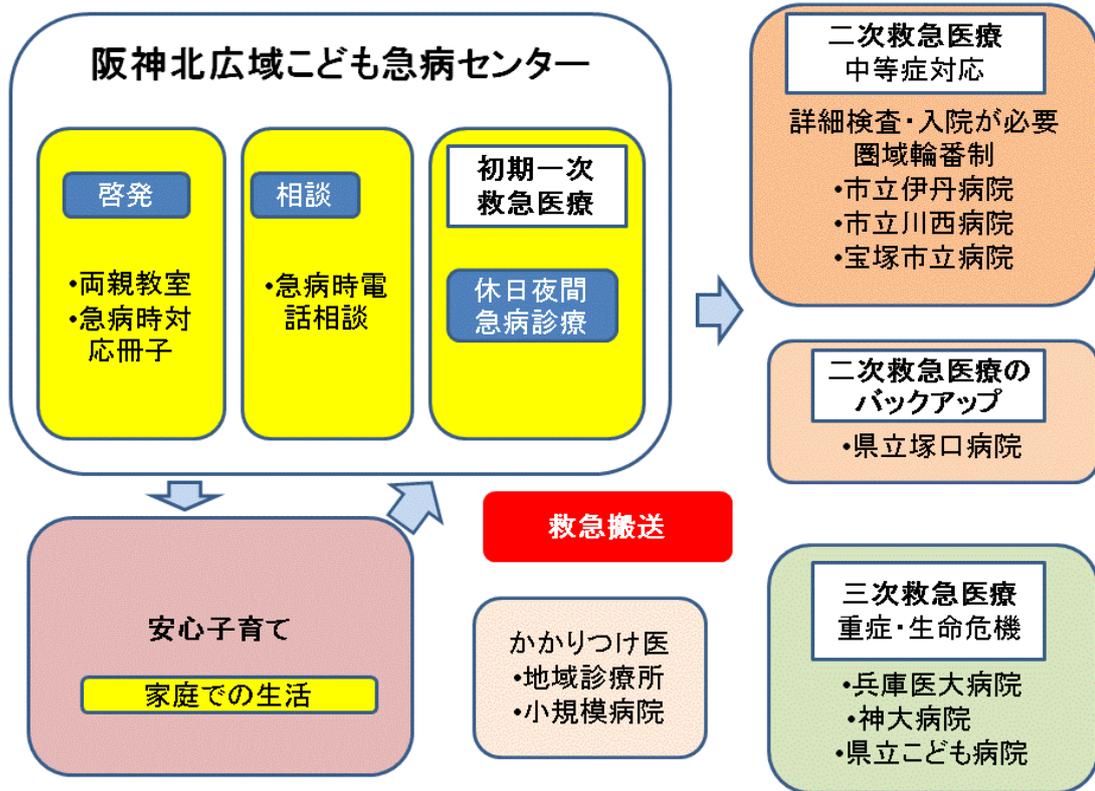
従来、阪神北圏域においても、重症度にかかわらず地域の二次救急病院である市立病院に救急患者が集中していました。その結果、小児科勤務医が過重労働となり、これまでの救急医療態勢が崩れ始めました。このため、阪神北圏域における小児救急医療の整備を望む声が上がってきました。

<阪神北広域こども急病センター>

平成20年4月に、伊丹市、宝塚市、川西市および猪名川町の3市1町、3市医師会および兵庫県の相互協力のもと、伊丹市に「阪神北広域こども急病センター」が設立されました。

阪神北広域こども急病センター

- ◆ 伊丹市、宝塚市、川西市、猪名川町の3市1町と兵庫県により設立する財団で、3市医師会の協力により運営
- ◆ 事業内容
 - ①休日・夜間における小児科初期診療
 - ②小児救急医療電話相談
 - ③小児救急医療に関する知識の普及事業
- ◆ 背景人口(平成20年12月)
3市1町の人口 608,673人、小児人口88,474人
- ◆ 兵庫県伊丹市に平成20年4月開院



時間外初期小児救急診療と電話相談を行うとともに、急病時の対応に参考にするための小児救急パンフレット「こんな時どうすればいいの」も3市の医師会の協力のもとで作成しました。



もくじ

1. 救急車を呼ぶ時
2. 発熱（38℃以上の熱が出た）
3. せき、喘鳴、息苦しい、呼吸が変
4. 嘔吐、下痢
5. 腹痛
6. けいれん
7. じんま疹、虫さされ、急に出現する発疹（皮膚のぶつぶつ）
8. やけど
9. 誤飲、誤嚥（変なものを食べた、飲みこんだ）
10. 転倒、転落、頭部打撲
11. 鼻出血
12. 不機嫌、泣き方が気になる
- 阪神北広域こども急病センターの受診について
電話相談のご案内

センターが開設されてからは二次医療施設の時間外小児受診患者は減少し、当センターと二次医療施設との役割分担ができました。また、開設 1 年後に行った住民へのアンケートでは、診療内容および電話相談に関して概ね満足している回答が得られています。

<市民の理解を>

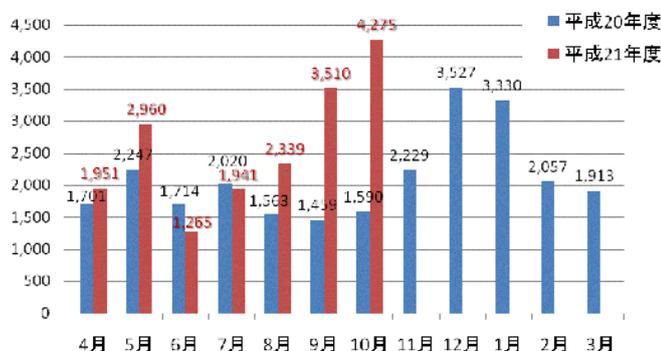
いつでも必要な小児救急医療が受けられ、子どもの健康を守るには、これまでの市町村単位での救急医療を行うことは不可能であり、阪神北圏域という広域で維持することが不可欠です。この広域化を理解していただく必要があります。

広域になっても

- 緊急性が高い患者を迅速に適切な医療機関に搬送できるシステムができているか。
- 初期の診断治療を行うことができる施設が各地域にあり、重症患者を受け入れ適切な施設(転送先)が確保されていないといけない。
- 小児科と小児科以外の救急医療の協力体制ができているか
- 救急隊でのトリアージの段階で、これまでのとりあえず直近の施設へという規制の概念を切り払っていく。
- 搬送する医療機関が可能な治療内容情報を明確にすること。
- 24時間365日広域小児救急医療ネットワークを作る。

初夏から深秋にかけて新型インフルエンザが大流行したため、10月・11月の受診者数は前年度の2倍以上となりました。患者急増に対応するためにセンターとしてもできる限りの努力を行いましたが、スムーズな運営には住民の理解と協力が必要であることを一層深く認識しました。

月別患者数(昨年度比較)



これからも当センターが安全安心の医療を提供して行くためには、地域住民のニーズを知り行政や医療関係者との理解を深めて行くことが大切ですが、市民の方々の救急医療に対する理解と協力が必要です。県立柏原病院の小児科を守る会は住民側から生まれた会です。24時間受診できるとは、24時間いつでも自由な時間に診療が受けられるということではありません。

県立柏原病院の小児科を守る会

3つのスローガン

1. コンビニ受診を控えよう
2. かかりつけ医を持とう
3. お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう

★「24時間受診できる」とは、24時間いつでも自由な時間に診療が受けられるということではない。